

「思案峠」 劇団「京すずめ」

幕が上がると、舞台中央に白い巨木が聳え立ち、見上げると生白い枝がバトンに絡まるように四方に伸びている。小鳥が囀り、太い根本の傍には飛脚が一人、黙って座っている。一見、長閑な昼下がり。時代劇でも始まりそうである。巨大な木に観客は圧倒されたように見える。だが私は落ち着かない。枝が白い触手となって覆い被さってくるような気がするのだ。観客に余計なことを考えさせるのはマイナスだし、あんな高い所にある物は、芝居が始まればどのみち視界には入らない。あの枝は無くても良かったのではないか。それより、折角のあれだけ立派な装置である。もっと劇の内容と関わって活かす術があったのではないかと思う。

遡ること三百有余年、元禄時代以降繰り返される峠を壊そうとする動きと対抗する人々が登場し、峠を通過する人生の一齣一齣が描かれる。そして峠や銀杏の木を始め自然への思いが語られる。上演前に、人生と峠を重ねた芝居だとアナウンスされていたが、その思いが良く出ていた。今回で六回目の公演ということだが、経験を重ねて堂々と楽しんで上演されていた。台詞は良く聞き取れ、内容も良く分かった。それぞれの役柄をしっかりと演じておられた。少し残念なのは、多くの場面で客席の方に体を向けて一定のテンポで台詞を言っておられたことだ。それではお芝居しているように見えてしまう。観客に伝えることと、観客に向かって言うこととは違う。

峠と大木をモチーフに台本を作るのは、悪いアイデアではない。ただ、話を盛り込み過ぎたのではないか。冒頭、子供を亡くした夫婦が出てくるが、彼らの物語が主題でないことが直ぐに明らかになる。そしてどれもがエピソードの域を越えず、話の筋を説明するだけになってしまった。もう少し絞っていれば、深まってドラマになったのではないか。熱演されていただけに、残念である。

木守功

京すずめ「思案峠」

長蛇の列の後尾に並んでの入場となったが、やはり客席も満席で、みなさんの集客努力にまずは感心した。

京すずめさんの舞台を拝見するのは3年前の演フェス以来2度目となる。出演者の皆さんは前回同様、堂々と演技されていたし、言葉も聞き取りやすく、そういった点ではストレスを感じることなく観ることができた。またそれぞれ役のキャラクターもうまく表現されていた。ただ、台詞が止まってしまうことが多過ぎたのはもったいなかった。2、3度ならばご愛嬌で済まされるところかもしれないが、止まる箇所が多く、やはり興ざめしてしまった。

登場人物たち、とくに夫婦、さらに言えば妻の感情の機微がこのドラマの起承転結を担っているのだが、それがいまひとつ伝わってこなかった。最終景で夫のくだらない言動に笑って、去っていくくぐりぐりが唐突で、私は戸惑ってしまったのだが、これはそこまでの流れがうまく作れていなかった現われではあるまいか。

妻役が最終的にはドラマを一手に引き受けなければならない重要な役割であったとは思いますが、全体として構成がまとまっていない印象で、それぞれの時代のエピソードが夫婦の心境にどういった影響を与えたのかが不明だった。各エピソードで描かれているような思いが「思案峠」という場所を通じて夫婦に届くような意図があったのかもしれない。それは脚本の段階でまとまりきっておらず、役者の演技で解決できる問題ではないように感じた。

舞台の設定について、イチョウの木がイカに見えるかどうかはともかくも、居所が前過ぎるのではないかな。役者の動きが前面の横の動きばかりになってしまって、立位置が横並びにばかりになってしまっていた。もう少し奥に配置することで、舞台の奥行きを生かした動線がとれたのではないかな。またそのイチョウの木には黄色の明かりが当たっていたことや、物語の雰囲気からも秋が深まってきた頃と見て見ているが、それにしても夫婦の衣装がその時期には薄着だ。この作品においては峠からの景色というのは観客が想像するべき重要な風景の一つであったろうから、季節感についてももう少し配慮があっても良かったのではないかな。

前回観た時にも感じたことだが、役者の演技が客席にばかり向けられる傾向があると感じる。客席に身体を向けて台詞を言うことは演劇において、まああることだが、前提として相手の登場人物か、あるいは自分自身か、いずれにしても物語の中の誰かに思いを伝えようとしなければならない。その思いを伝えられた登場人物はそれを動機として、次の言葉が発せられ、またそれを動機として次の言葉や動作が出てくる、という連続で会話が成立しなくてはならない。思いを客席に吐露しては会話は成り立たない。会話が成り立たなければ、人物の感情は表現できない。表現どころか生み出すことも出来ない。言葉を発することよりも共演者の台詞を聞き感じることに、より力点を置く必要があるのではないだろうか。少なくとも今回の作品についてはそれは不可欠だったように思う。

藤原大介（劇団飛び道具）